

●和紙の原材料を職人自ら生産

7月上旬、美濃市内のコウゾ畑で、上質の原料を作るのに欠かせない「脇芽かき」の作業体験の講座を実施しました。コウゾは1年で3メートルも伸びますが、夏の間、たくさん脇芽を出します。そのままにしておくと太い枝に育ってしまい、和紙原料となる内樹皮を剥くのにとても苦労するのです。紙漉きに適した品質にするためには、炎天下に何度も脇芽かきが必要です。

美濃和紙のなかでも最高級の「本美濃紙」に使われるのは茨城県産のコウゾですが、生産者の高齢化、後継者の不在により、今後の供給が危ぶまれています。そのため美濃の手漉き和紙職人たちが岐阜県内にあるコウゾの生産組合に入会し、自ら畑で原材料の生産に携わり始めました。県の森林研究所や森林文化アカデミーでも、この取り組みをお手伝いしています。



あいにくの雨の中で行われた、脇芽かきの作業体験

工芸の作り手が原材料の生産にまで関わらなければならなくなった例は、和紙だけではありません。長良川鵜飼の鵜籠をつくる職人たちは、毎月竹林整備を行います。秋には自ら竹を伐採・運搬しています。岐阜の和傘職人たちは、部品に用いるエゴノキを収穫するイベントを自ら運営しています。

●人材育成の仕組みづくり

昨年、「長良川の鮎」が世界農業遺産に認定されました。そのアクションプランには、長良川が育んできた和紙、和傘、鵜飼用具などの工芸を守り、活かしていくことが謳われており、県が人材育成のための補助制度を作り、流域の自治体を通じて支援していくことになりました。

しかし補助制度を活用するにはいくつかのハードルがあります。まず自治体側にとっての難しさは、長良川流域の工芸が一つの自治体の枠に収まらないということ。この地域では、上流の町で原材料を収穫し、下流の町で加工してきたという特徴があります。たとえば和傘に使うエゴノキは美濃市で収穫し、和傘の完成品は岐阜市で作ります。そのため和傘を支援しようにも、一つの自治体では支援策が完結しないのです。



傘用のエゴノキを収穫するイベント。和傘職人たちが実行委員として運営している。

一方、現場の職人にとっても補助制度はありがたいことですが、製品づくりに加えて原材料確保までやらなければならぬのに、その上申請書や報告書を書いたり、さまざまなイベントの企画運営まで抱えるわけにはいきません。

「森林文化の結晶、  
岐阜の伝統工芸を支える仕組みづくり」

岐阜県立森林文化アカデミー 准教授 ● 久津輪 雅